

生文研メール

7号

平成19年7月11日

Ver.1.1.2

生活文化研究所

〒700-8516

岡山市伊福町2-16-9

ノリダ ム清心女子大学

e-mail

ricch@post.ndsu.ac.jp

目次

日本人と海藻のかかわり(7)

不思議な食べ物「イギリス」料理

今田節子 1

体験的生活文化史 昭和編 その七

新田義之 2

武士の「一分」 西鶴研究しほれ話7

広嶋 進 4

不思議な出会い(その七) ハワイ大文字・崎原

横山 學 6

編集後記・お知らせ

日本人と海藻のかかわり(7)

不思議な食べ物「イギリス」料理

今田節子

「イギリス」、あまり聞き慣れない呼称である。イギリスは海藻類の一種で、この海藻を煮溶かし凝固させたものが「イギリス料理」である。昭和五十五年、伝統食の調査で岡山県南東部の生窓町を訪れ

た際、この不思議な海藻と料理に出会った。これが、四半世紀におよぶ海藻の食文化研究の発端となった。

伝統的な食生活のなかでイギリス料理が伝承されていた地域は、瀬戸内沿岸地帯と島原湾周辺の地域、すなわち、内海性の高い地域が中心である。呼び名は地域によってイギリス、イグス、イグス、イギリスなどと異なるが、実際にイギリス料理の原料として使われていた海藻は、イギリス属のアミクサであると海藻分類の専門家から教わった。

イギリス料理は「仏様のごちそう」といわれるように、どの地域でも葬式、法事、盆などの仏事の供物や料理としてなくてはならないもので、刺身の代わりや酢の物、和え物として使われる精進料理であった。岡山県生窓町では「鯛が人の祝い事に最大のご馳走であるように、イギリスは仏様のご馳走」といわれ、大正初期には初盆のお供えとして提灯と乾燥イギリスを贈ったと伝えられている。また、江戸時代から淡州のイギリスが一番上質といわれた淡路島では、仏事のイギリス料理は「仏様の鏡」「仏様のご馳走」といわれ、盆が近づ

くと晒し乾燥したイギリスやイギリス料理が市販されており、イギリス料理を供物とする習慣が最近まで伝承されていた。そして、芸予諸島や島原湾地域では祭りや婚礼の料理としても使われた。

イギリスは水で煮ても溶けず、固まらないという寄せ物料理にはありがたない性質をもつ。しかし我々の先人達は、イギリスを米糠汁や生大豆粉、大豆の茹で汁を使って煮溶かし、冷やし固めるという調理法を工夫してきた。芸予諸島から今治周辺地域では生大豆粉を、真鍋島(岡山県)や佐柳島(香川県)周辺では「あめ」と呼ばれる大豆の茹で汁を、その他の瀬戸内沿岸地域や島原沿岸地域では米糠汁を使うという興味深い地域性を示す。すなわちイギリス料理は、半農半漁を生業とする地域が多い瀬戸内沿岸地帯や島原湾沿岸地帯で、海からの恵みである海藻と、稲作や畑作から収穫された米や大豆を上手に組み合わせた料理として伝承されてきたのである。

米糠汁を使ったイギリス料理：新しい米糠を木綿袋に入れて、水の中でもみ洗いして米糠汁をとる。晒し乾燥したイギリスをよく水戻しし、ヒタヒタに浸かるほどの米糠汁を入れて火にかける。よく混ぜながらイギリスが溶けるまで煮る。煮ることを「イギリスを練る」と表現するように、粘りが強くて焦げつきやすいため手が離せない。江戸時代の文献に、戯れことをいいながら煮ると固まらないといった記載があるが、このことをいったのかも

しれない。よく溶けたものは漉さずに流し箱やもろぶた、すし桶に流し入れ、涼しい所で凝固させる。

砂糖を入れて固めたものは「砂糖イギス」と呼ばれ、子供達のおやつとなった。そして、人參や高野豆腐、油揚げ、椎茸、かまぼこ、グリーンピーなどを味付けして入れたものは「具イギス」と呼ばれた。島原湾沿岸地域では人參、椎茸、焼き魚、ねぎなどを入れたイギス料理が作られてきたが、これは「イギリス」と呼ばれている。

大豆粉を使ったイギス料理：水戻ししたイギスを水に入れ、だしの干しエビ、人參や椎茸のせん切りを入れて沸騰するまで炊き、そこへ水溶きした生大豆粉を加える。焦げ付かないように混ぜながら炊き、イギスが溶けると砂糖と塩で淡味をつけて流し固める。芸予諸島から今治地域では、この料理が豆腐に似ているせいか「イギス豆腐」と呼び、現在でも夏になると料理が売られている。

大豆の茹で汁を使ったイギス料理：味噌を搗いた後に残った「あめ」と呼ばれる大豆の茹で汁を使う。あめを少し水で薄め、その中に水戻ししたイギスを入れて煮溶かし、凝固させる。味噌をつくとたいの家庭でイギスを沢山炊き、近所同士であげたりもらったりする習慣があったという。

これらのイギス料理は、芥子酢味噌や酢醤油で食べたり、酢の物、白和えなどにされた。また、

九州地方では凝固したイギス料理を味噌漬けにして日常食として食べられた。イギスを味噌汁に入れて食べることもあったといわれ、ドロツとした口触りで、腹薬になるといふ地域もみられた。

筆者はイギスの溶解や凝固に有効な成分が何であるかを知りたいと思い、実験に取り組んだことがある。実験の結果、米糠汁や生大豆の水溶き、大豆の茹で汁に高濃度に含まれるリン酸基がイギスの藻体を溶かす作用を持ち、イギスの細胞膜から溶出した粘質多糖類にカリウムイオンが作用して凝固性を促進することを明らかにした。各地域で自給できる米や大豆の中にその効果があることを見いだした先人の知恵は、化学的にも裏付けられるものであった。

イギスの歴史を探るための記録は多いとはいえないが、すでに平安初期の『倭名類聚抄』に「海髪 倭名イギス」とあり、色が黒くて乱れ髪のごとくであると説明している。そして、「大凝菜」（オオコルモハ）と示されたテングサより海藻が細いためであることが「小凝菜」（ココルモハ）とある。さらに江戸時代の『和漢三才図会』には「阿州、淡州、備州、泉州に産する」とあり、瀬戸内海に自生した海藻であることがわかる。また、今日同様に「水にさらして白くしたものを煮て凝固させ、酢末醬であえて食べる」とある。このように長い歴史のなかで、化学的にも有効な不思議な食べ物「イギス料理」が編み出され、伝承されてきたものと推測される。

てきたものと推測される。

- 【主な参考文献】
- (1) 『古事類苑』 植物部 吉川弘文館 一九八五
 - (2) 『諸本集成倭名類聚抄』 本文編 京都大学文学部国語学国文学研究室編 臨川書店 一九七七
 - (3) 寺島良安著 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳 訳注 『和漢三才図会』 平凡社 一九九一。
 - (4) 今田節子 『海藻の食文化』 成山堂書店、二〇〇三。

体験的生活文化史 昭和編 その七

新田義之

先に述べたように、私は昭和二十五年四月に津幡高等学校に入学した。この学校は新制度の発足にともない旧制の高等女学校と農学校とが合併してできた普通高等学校で、私たち一年生を除けば二年生と三年生は旧制の各種中等学校の生徒だった人たちであった。彼らはただその住所が新制の津幡高等学校の学校区内にあるという理由だけでこの学校に移されたのだから、生徒間にも先生たちと生徒たちの間にも、いろいろと奇妙な人間関係や感情的な軋轢が渦巻いていたのは当然である。彼ら上級生たちの多くは金沢市にあった石川県立第一、第一、第三中学、あるいは私立金沢中学

などに、あるいは第一、第二高等女学校、私立金城女学校などに汽車通学をしていた人たちが、小学校を出てからは男子学校と女子学校に分かれて教育を受けてきていた。中等学校の間の男女交際も、表向きは厳重に禁止されていたのである。

したがって男子生徒は、かつては通学の汽車の中でちらちらと横目で眺めてきた女学校生徒と思いがけずも同じ教室で学ぶ同級生になり、自由に交際できるようになった。この状況から生まれた開放感と緊張感から、かつて異性に対して抱いていた無知から生まれる好奇心が、次第に相互理解と暖かい友情ないしは愛情へと高まり深まっていったようである。高校時代に結ばれ、そのまま現在までの半世紀あまりを共にしているカップルは、私の高校時代の同期生や上級生・下級生に少なくない。

こうして私は中学一年生から新しい学校制度で育ち、学制の改革による混乱の渦に巻き込まれなかったが、私たちより一年から三・四年ほど上のクラスの人たちは、このように旧制と新制の狭間で、多かれ少なかれ異常な体験をしたわけである。しかしもう少し年上の世代は、このような憂き目に会うことなく、旧制度の中・高等教育を最後まで

で受けることができた。私には五学級上の兄があり、彼は私が新制中学一年生の頃、旧制第四高等学校（通称四高、しこう）の二年であったが、その後もつつがなく、旧制の東北大学を卒業している。私は新制中学を経て新制高等学校に入るまでの期間に、兄とその友人たちを通して旧制高等学校生の生活の一部を垣間見たので、しばらくその記憶を辿ってみよう。

旧制高等学校は帝国大学への進学を前提とする基礎的高等教育の機関であった。従って学生たちには、将来の日本を背負うのは自分たちだという誇りと自負があった。つまり強烈なエリート意識である。優秀だけれどもまだ幼く、それだけに純粹で理想主義的な心情を何よりも大切にする傾向が強く、社会生活に必要な知恵や技術を卑しいものだと蔑む気風が、彼らの行動の全てに染み込んでいて、その極端さはほとんど常軌を逸していると言ってもよいほどだった。

まず彼らの服装だが、警沢ほど低俗なものはないという理由から、できるだけ汚れて綿のみでた制服ないしは和服を身にまとい、腰からは茶色に汚れた手ぬぐいを長々とぶら下げ、制帽は、あらかじめ泥水につけてぼろぼろにしておき、その

天井を十文字に破ったものを被った。これを弊衣破帽と称し、更に包葉の厚歯に太い鼻緒をすげたものを履くのが普通だった。冬になるとその上に黒い破れかけたマントを羽織る。そして町を大きな声で寮歌を歌いながら歩くのである。

寮歌というのは、高校生の多くが学寮で生活していた関係で、各高校でそれぞれの学寮の記念祭などに歌うため、寮生たちの手で作詞作曲した歌を持つていた。毎年記念祭の折に新しい寮歌が募集されたが、よく歌われるのは中でも名歌として認められたもので、例えば第一高等学校の寮歌「嗚呼玉杯に花つけて」などがよく知られている。四高の寮歌にも全国に知られた名歌が少なくない。寮歌は概ね漢詩風の大言壮語に、「ヨナヌキ音調」（長調の第四音ファと第七音シを抜いた音階）のメロディーを付したもので、軍歌に近い音楽的には幼稚なものだが、十六・七の若者の血を滾らせる煽情性と感傷性において、多大の効果があった例として先に挙げた「嗚呼玉杯に」の一部を載せておこう。

嗚呼玉杯に花つけて

作詞 矢野勳治 作曲 楠 正一

嗚呼玉杯に花つけて 緑酒に月の影やどし
治安の夢に耽りたる 栄華の巷低く見て
向ヶ丘にそそり立つ 五寮の健児意気高し

芙蓉の雪の精をとり 芳野の花の華を奪い
清き心の益良男が 剣と筆をとり持ちて
一たび起たば何事か 人世の偉業成らざらん

濁れる海に漂える 我が国民を救わんと
逆巻く浪をかきわけて 自治の大船勇ましく
尚武の風を帆にはらみ 船出せしより十二年
(以下略)

この歌詞について一言しておくならば、「向ヶ丘に立っている一高の五つの寮に住んでいる我々は、旨い酒に酔いしれて平和な生活に満足している警沢かつ低俗な人々を軽蔑し、元気に希望に満ち理想に燃えている。自分たちが武力と筆力(文化の力)を用いて改革に着手すれば、出来ないことなどないだろう。墮落した社会に目的もなくくだらだらと日をすごしている日本の国民を救うために、われわれ一高の学生たちが困難な社会改革の

道に踏み出してから、今日で十二年が過ぎた。」
というような意味で、当時の若いエリートたちがどのように単純な正義感と自負とに生きていたかを、端的に物語っていると云えるだろう。

「このような若者の気持ちには大変尊いものがあり、戦中戦後の反権力的平和運動、反戦運動などに身を投じた人たちにも、抱く理想の方向が異なるだけで、同種の自己肯定と自己讚美が行動エネルギーの源泉だったと思われる。それぞれの理想追求が結局どのような帰結に達したのかは、後世になってはじめて判明するものだから、同時代に生きていた私たちには、自分の周囲を取り巻くこうした雰囲気がどんな種類のものなのかは見通せるわけがなかった。一高を手本とする日本中の旧制高校の生徒たちのこのようなステレオタイプの理想主義に対して、これに性格的あるいは生理的な嫌悪感をもった人々たちも居ない訳ではなかった。この少数派を単純に賛美する気はないのだが、しかし今になって考えてみるに、もしも旧制高等学校が新制のそのように男女共学であったならば、高踏的な「壘カラ」(裏返しハイカラ)の風俗など生まれず、青年男女の社会的・人間的な成熟がもっと自然な形でもたらされたのではなからう

かと思つのである。

武士の「一分」

西鶴研究「ほれ話」 7

広嶋 進

山田洋次監督の時代劇映画『武士の一分』(二〇〇六年二月、松竹)が、先頃公開された。残念ながら、まだ観る機会を得ていないが、映画の原作である藤沢周平(一九二七-一九七)の小説「盲目剣 劔返し」(一九八〇年)を読んできた。「武士の一分」という言葉が、原作のなかにすでに記されているのか、あるいは脚本執筆者が作品の内容にふさわしい語句として、新たに映画の題名にしたのか、気になったからである。

原作は、主人公の武士三村新之丞が盲目になって一年半、妻の加世の行動に不審を感じ、密通を疑うところから始まる。やがて目撃情報によって妻の浮気が動かぬものとなる。そして新之丞は不倫相手の武士を討つ決心をする……。ここまで読み進むと、本話がいわゆる「妻敵討ち」の話であることに気づく。

「妻敵討ち」とは、「妻敵」すなわち「自分の妻と密通した男」を討ちとること、あるいは妻と相手の男をともに殺害することをいう。原作小説では妻の不倫相手は夫の上司である。妻は、失職した夫の自刃をなんとか阻止しようと、上司に家名存続を願い出て、その見返りに関係を男から強要される。

しかし、夫は妻を離縁しても、殺そうとはしなかった。また妻も、その不義は夫の身を案ずるあまりの過失であつたとされている。夫は妻の不倫を最終的には許しているようであるし、また妻も最後まで夫に尽くそうとする。彼女は罪を犯したが、その態度や心持ちはあくまでも「貞女」として描かれる。

「妻敵討ち」は、戦国時代以来近世においても夫が、姦通した妻とその相手の男を殺害しても罪に問われなかった。したがって本話は、密夫を殺害するものの妻を手討ちにしない「妻敵討ち」の話であり、また心ならずも不倫をしてしまった「貞女」の話と言える。

主人公・新之丞が密夫の島村と戦う場面に、次のような箇所がある。

島村は唾棄すべき男だが、一刀流の剣士でもある。盲人の剣に対して、何か工夫があつたかも知れなかった。

だが、狼狽はすぐに静まった。勝つことがすべてではなかった。武士の一分が立てばそれによい。敵はいずれ仕かけて来るだろう。生死は問わず、そのときが勝負だつた。(「盲目剣返返し」六)

「武士の一分」という語句は原作に記されていた。「一分」とは「面目、意地」の意味である。右の決闘では盲目の新之丞に、通常ならば勝ち目はない。いわば、名誉を守るための捨て身の戦い

であつた。

「一分」という語は現代では完全に死語となつていたので、たとえば、授業で西鶴の武家物を読むときには「一分」の意味を受講生に説明しなければならぬ。それほど武家物には頻りに「一分」の語が登場するし、また重要な言葉でもある。西鶴作『武道伝来記』(一六八七年刊)には、次のように「一分」の語が見られる。

親仁侍の一分も立たず、腰抜けの取沙汰、座中大笑ひなれば(巻三の三)

我いつはり者に成りて、一分立たず、堪忍ならず(巻四の三)

「世間、我ら、一分立ち申さず」と、抜き打ちにするを(巻八の二)

全部で十二の用例があるが、そのうち右の引用のように、十例において「一分立たず」の形でこの言葉は使われている。

「一分」とはもともと「十分の一。ごくわずか」という意味の言葉である。それが「一身、自身」「一身の面目」の意味で使われるようになった。「一分が立たぬ、半分も立たぬ」という言い方があるように、「一分」には「わずかな、この身の面目」といった含意があるようである。したがって「自分」という語が、文字通り「その人自身。自己」の意味であることと対照的である。「自分」には、周知のように、現代大阪の会話において二人称の用法があり、また「御自分」「御

自分様」という敬語があつた。これに対して「御一分」「御一分様」という語句はない。

「妻敵討ち」は江戸時代において「敵討ち」に準じた扱いを受けた。しかしながら、諸国の敵討ちを類集した『武道伝来記』には「妻敵討ち」の話はひとつも採用されていない。というのも、「妻敵討ち」は、少なくとも十七世紀には、武士としてみてもないこと、恥ずかしいことと意識されていたからと思われる。

西鶴作『新可笑記』(一六八八年刊)の巻三の一には、「女敵に身替り狐」という「妻敵討ち」をモチーフにした章がある。そこには次のようにある。

最前賢き人の、「女敵討つ程の者にはあらず」との御一言(こなりと)(巻三の一)

(以前賢い人が、「女敵を討つほどの愚か者ではない」と言われた御一言は、まさに「こだ」と思つて)

巻三の一の主人公の武士は、妻が浮気をしているとの噂が立っていたが、その証拠の恋文を発見する。悔しさのあまり、ただちに妻と密夫を殺そうとする。しかし、右の引用のように考えて思いとどまり、一計を案ずる。漁師から古狐の死骸を買い、仲間を大勢集めた夜に、その狐を斬り捨てるという演技をする。これによって妻の密通の噂は狐の仕業といふことになり、一件落着。そのうち妻を実家に帰り、世間の評判がおさまつたところ

で、男は密夫を探し出し、見事討ち果たした。右のあらすじによっても、当時の武士が妻の姦通及び妻敵討ち自体を、いかに恥ずかしいことと感じていたかが分かるであろう。間男成敗は、武士にとっていわば恥の上に恥を重ねる行為でもあった。

原作の藤沢作品で、主人公の家名存続は妻が「自分の貞操で買ったものだった」と読者をミスリードしておおきながら、家名継統は実は密夫の進言とは無関係で、藩主の裁決によるものだったとするのはなぜなのだろうか。

それはもしも、新之丞の家禄存続が島村のおかげであるならば、恩人の島村を彼は斬ることができなくなる(あるいはためらうようになる)からである。作者は主人公に「家禄存続」か「妻敵討ち」かという二者択一に直面させたり、迷わせたりしないように、ストーリーを組み立てている。

また「妻敵」の島村は新之丞の上司であるが、近世において「主殺し」は不忠であり、親殺し以上の罪であった。したがって主人公は「妻敵討ち」には成功したが、「主殺し」の大罪を犯している。ところが、原作では「島村藤弥の死は、屋敷の者から不審死としてとげられ」「その相手が盲目の新之丞だとは、思いもしなかった」として、新之丞による殺害であることは誰にも知られなかつたとされる。

「このような視点から原作を振り返ってみると

本作は時代を江戸に設定し「妻敵討ち」の型を踏まえてはいるものの、愛妻を奪われた夫の絶望と復讐という一点に焦点を合わせて語られた作品であることが明らかに。

「盲目剣返し」は、夫の病気、失職、妻の不貞といった重なる試練に耐えながら、夫婦が生き延びていく話であり、妻と夫の純愛の話である。本話はその意味で、紛れもない現代小説なのである。

不思議な出会い(その七)

ハワイ大学 Dr. 崎原 横山 學

ハワイ大学夏期大学坂巻駿三教授の琉球・沖縄研究を助けたのは、「一人の貢」でした。そのひと、Misugu Sakahara(崎原貢博士とは、最初のハワイ大学調査以来の長いお付き合いです。宝玲文庫の琉球資料がハワイ大学夏期大学の学長室に保管されていたとき、その部屋を管理なさっていました。すでに学長だった坂巻駿三は亡くなっていましたが、宝玲文庫本はそのままそこに残されていたのです。その後シンクレア図書館に移管され、現在はハミルトン図書館の四階に保存されています。

崎原貢氏は平成十三年の春に亡くなりましたがその数年前に、自分の琉球研究や坂巻駿三について

て親しく語ってくださいました。夏の午後の日差しが窓越しに眩しく、遮光シールの破れからは眼下にアラモアナ・ショッピングセンターの屋根が見える部屋でした。

崎原氏は、太平洋戦争が終了した直後に、戦争によって孤児となった同年代の若者と共に、米軍の輸送船で、長い船旅を経て米本土に送られたそうです。その途中に立ち寄ったホルルで通訳をしてくれたのがドナルド・キーン(Donald Keen)だったと語ってくださいました。米国政府からの奨学金を得てオレゴン州立大学に入学し、学士と修士の学位を取得して、ハワイ大学キャンパス内の東西文化センターの仕事に就いたのです。ちょうど「六十年安保」の頃で、米国にとっても沖縄が重要だとされた時でした。「琉球民族について」という論文が書かれ、日本民族に属するのか、それとも独自の民族なのか、その帰属性を学術的に証明することが求められたのです。東西文化センターがハワイ大学の構内に設置され、フランク・ホーレー(Frank Hawley)の知人でもあったG・H・カー(George H. Kerr)が中心となって、琉球・沖縄文献の収集に着手した頃です。カーの助手として働くこととなった崎原氏は、壮

大な文献収集プロジェクト「一人による八重山から鹿児島までの全域にわたる写真複写事業」を任されました。折り良く、ホーレーの遺族から譲り受けた宝珍文庫の整理のために、比嘉春潮と仲原善忠がハワイ大学に招かれていたのです。その二人から、三ヶ月間にわたり琉球の文献や古文書の読み方の指導を受けました。昭和二十七年の春のことです。

六月末に事業は開始されました。まず東京に到着。二台のペンタックス・カメラと二台の露出計を含む撮影機材を購入。国会図書館・公文書館・東京大学・宮内庁書陵部を調査し、仲原善忠や崎浜秀明を訪ねました。公文書館には内閣文庫、東京大学には民俗資料としての琉球・沖縄の古文書が収蔵されています。都内で約四十名の関係者に会い、四千六百駒の撮影をしたと語っていました。その後沖縄に渡り、沖縄八重山の石垣島を基点として周囲の離島（与那国島・黒島・小浜島・波照間島・西表古見村）で撮影をして、宮古島（伊良部島・来間島・御神島）、沖縄本島（伊平屋島・伊是名島・慶良間島・久高島）、奄美諸島（沖永良部島・加計呂麻島・宇検村・与論島）と巡り、六ヶ月を費やして鹿児島まで、北上してゆきまし

た。この事業の全体で二百五十九件、三万駒の撮影を行なったと聞きました。途中でカメラが故障して那覇に修理のために急送したり、台風季節で各地で足止めを強いられ、何日も宿所で天候の回復を待ったということでした。しかしながら、そのことが「愉快だった」と言っていました。時期は異なりますが、わたくしもカメラを抱いて青森から那覇まで同様の調査旅行を繰り返してしましたから、苦労話に花が咲きました。様々な突発事件を楽しそうに回想していらした姿が、今も目に浮かびます。

沖縄戦で沖縄本島の記録類は殆ど消滅し、残されていたのは八重山・宮古・奄美周辺の離島の地方文書でした。沖縄戦の激しさを知っている崎原氏は、これらの文書類を早急に記録に残さねばならないという、強い使命感に駆られていたのです。カーの撮影事業はこの他にも行なわれました。早稲田大学八重山探検隊長として沖縄を訪れた滝口宏教授と協力して、八重山地域の在番所記録（地方文書）を集めた喜舎場家文書の撮影をしました。喜舎場永恂氏は村の役場が廃棄した古文書の束を救い出し、自宅に保管していたのです。

この撮影事業によって、琉球・沖縄の地方文書

の形式や概要を、崎原氏は現物に触れながら一気に学習したのでした。これを機に、坂巻駿三は宝珍文庫琉球資料の実際的な整理を崎原氏に託しました。ハワイ大学に運ばれた約二千点の宝珍文庫本については、ホテルの便箋に急遽書き写して、作成された書名目録があるのみで、著者名や出版者、寸法・法量を含む詳しい書誌情報は何も記録されていませんでした。図書資料として管理するためには、大切な作業が残っていたのです。

崎原氏は坂巻駿三の下で博士論文「徳川時代における薩摩藩財源の中の琉球の重要性」を仕上げ、昭和四十六年にハワイ大学に提出しました。その後、夏期大学の事務長、ハワイ大学歴史学科教授、ハワイ国際大学学長を務められました。在ハワイの沖縄出身者の聞き書き集『Uchinachu (ウチナンチュー)』をまとめる事に助力し、カーの『琉球の歴史』の改訂訳など、数々の沖縄研究書の翻訳もしています。昨年、ハワイ大学出版部から『Okinawan-English Wordbook』が刊行されましたが、これは崎原氏の遺稿「英文現代沖縄語及び文化辞典」が基になっています。ハワイを訪れた沖縄からの研究者の殆どが、崎原氏を訪ねてお世話になりました。

崎原氏の「さあ、ベラタニア通りの美味いベトナム料理を食べに行きましょう」との言葉で、二時間ほどのインタビューが終わったのを憶えています。その時、前述の調査日誌（報告書）を渡されました。これを翻訳して紹介するという約束を未だ果たしていません。『生活文化研究所年報』で紹介したいと考えております。

崎原氏の残した蔵書類は、G・H・カーの旧蔵資料と共に、琉球大学附属図書館に寄贈されました。琉球図書館郷土資料室には、喜舎場永恂文書を初めとして、伊波普猷文庫・島袋源七文庫・仲原善忠文庫・ブル文庫・宝玲文庫（複写物）・宮良殿内文庫・宮里政玄文庫・仲宗根政善沖縄方言資料・カー文庫・奥里将建文庫・矢内原忠雄文庫・原忠順文庫、そして松田貢文庫があります。もう一人の「貢」はDr. Mitsugu Matsuda（松田貢）で、崎原氏と同じ沖縄出身の研究者でありました。いずれご紹介したいと思います。

生活文化研究所講演会のご案内

平成十九年七月十四日（土）二時～四時

本学中央棟630ND教室

講師 天野晴子（日本女子大学家政学部准教授）
演題 「江戸時代の女子教育について」

新規購入の主たる図書 『大宅壮一文庫雑誌記事索引（CD-ROM版）』・『重刊記資料集成（第一五～三〇巻）』・『第一高等学校校友会雑誌総目次・執筆者索引（DVD版）』・『笠戸丸から見た日本』

『性文庫補遺「女筆手本類」』（第一～十二巻）・『太平洋問題調査会研究』『宮田登日本を語る』（第十二～十六巻）・『アーカイブスの科子』

生活文化研究所年報のご案内

『生活文化研究所年報』（第二十輯）が出来上がりました。掲載の内容は次の通りです。ご興味をお持ち顶けましたら、ご遠慮なくご相談ください。

小沢詠美子「浅草花屋敷における動物飼育について 幕末～明治を中心に」

新田義之「大学の創立理念と学問伝統」

今田節子「行事食としての小豆の食習慣の意味を考える 正月および盆関連行事を中心に」

横山 學「太平洋戦争開戦期の坂西志保と日本送還」

照山越子・横山學共訳「フランク・ホーレー母（ジェシカ）の書簡」（その二）

横山學解題 広嶋進・中島千尋翻刻（翻刻史料）『子孫繁盛記』（天明四年刊）

生活文化講演会／演題一覧
生活文化研究所年報／既刊目次

生活文化研究所年報の既刊目次と生文研メールの全文をWEBでご覧になれます。

http://www.ndsu.ac.jp/1000_guid/1700_inst/1730_la02/1730_la02_org01.html

生活文化研究所「演習室」の利用について

演習室の利用の際には、下記のことを守ってください。

- 一、利用者は、利用者カードに必要な事項を記入してください（授業時間以外で部屋を利用する場合）。
- 二、図書の利用は、室内に限ります。
- 三、パソコンの利用は自由ですが、設定は変更しないでください。
- 四、ゴミは各自で処分してください。
- 五、私物は、各自で管理してください。

編集後記 お知らせ

この春から、前任の広嶋進教授に代わりまして横山學教授が所長となりました。助手を務めておりました中島千尋さんの後任は、西岡真依子さんです。

(Y)